



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 B 17 18 19



特遠  
841  
♂









卯の花に更なるの定紋深きを結  
指もくまのひのさるるに若者の梅巻の美  
落て見せしう兼さるる行ふ人のまゆの  
まろし物

あまぞ流行風廓の夏のあひはさるるつたて感あまの  
軒をうらひ看まぶ則ち梅巻の賑はさ  
卯せん梅とおるヨクト言あうり伴文町の世を看く  
居る風情もつとも好なる若者あうり各戎はさるる

代におもたれぬい 夫ハ家美を伝承する人たる速ひよ  
又後を解く候にちあまの 夫ハコヤよりおる言を成ヨ解ク  
あまの廿露梅あまの妙を得る居るヨ 夫ハそのあまの言サ  
入十年うら梅をさるるつたて 夫ハ若くは若助どんヨそ  
あててその年の幾まを思ひご 夫ハ大なる古十八九のうら  
と思ひて居る 夫ハ六の字を捨て 夫ハ十八九のうら  
のうら空却ら経よおるはるるの教法師小文さんの  
唐人の俄はか小糸玉のおまさんてはらるるめではらるる



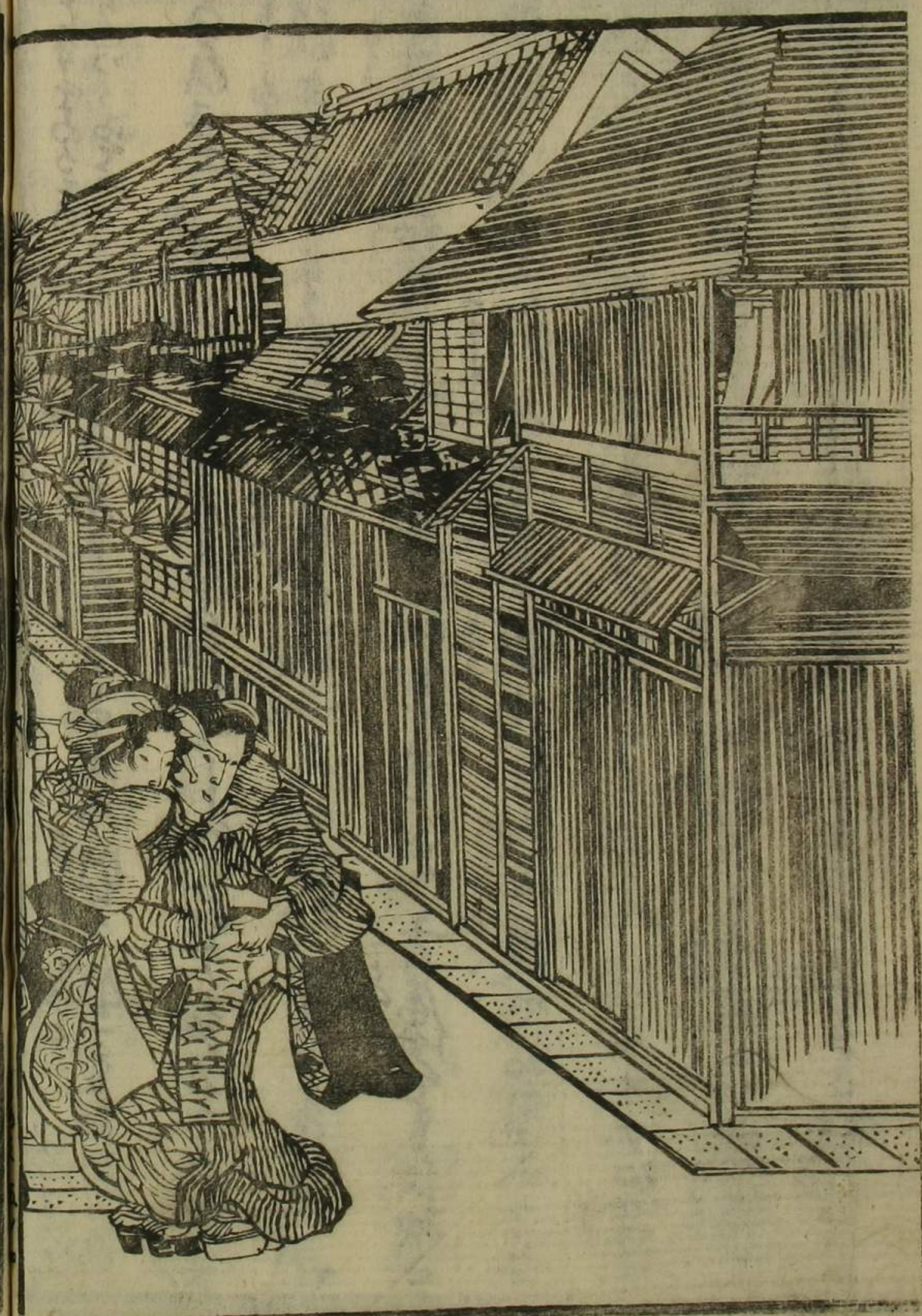
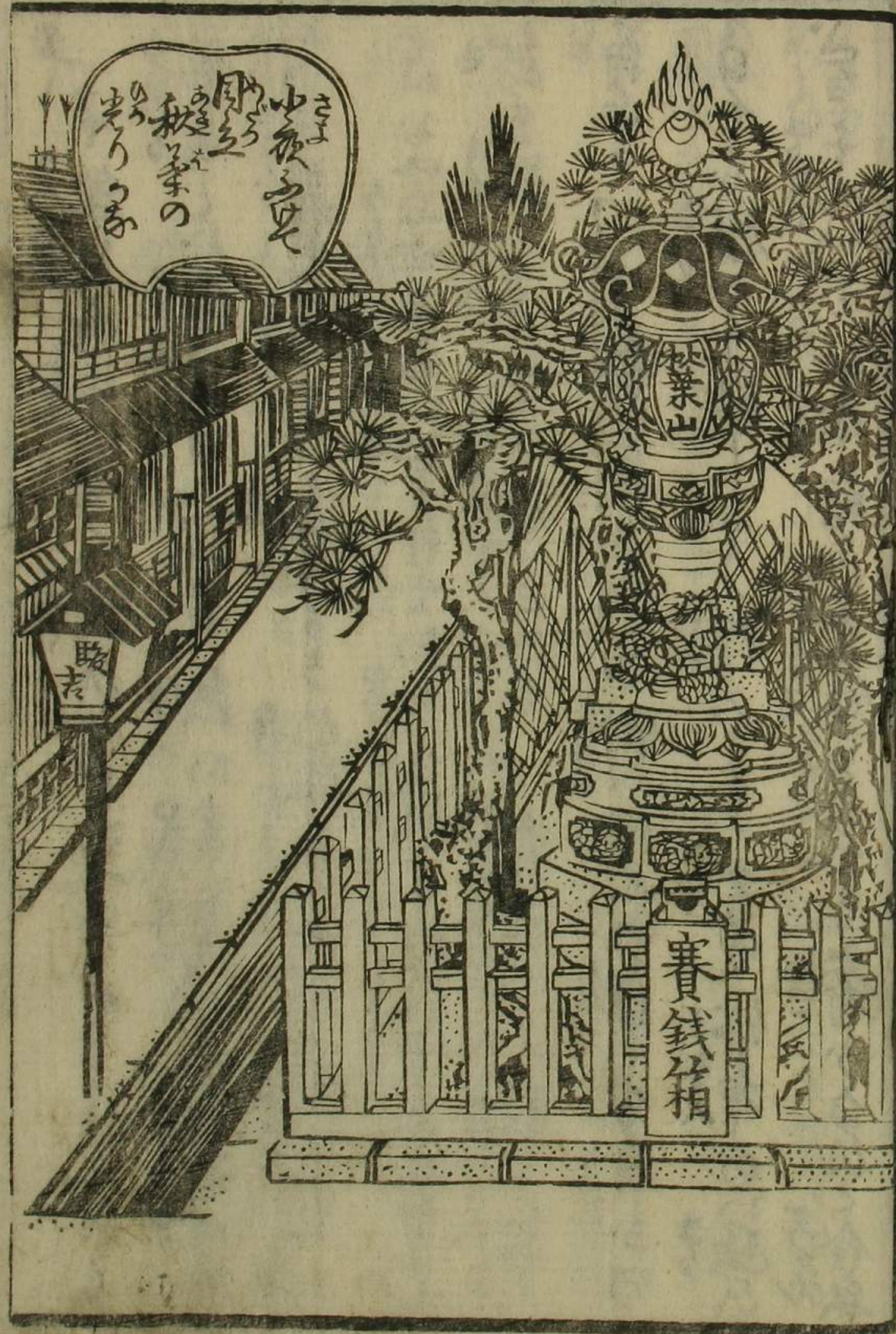
でこのくお茶ざらふ 年いんごは元天窓が貴族居る  
ト言ひ梅の實と多げつける ぬかたづまを在助の後の  
新に居る 藝者の多くなる 梅をお付らさうと藝者  
肝をくさう大まな聲をいそ ぎうーお梅さん 痛のヨお科  
さひヨ送るいそ ぎうー 早お梅さん 夏平は元ヨうは  
だまう 年いんごは元天窓が貴族居る ぬかたづまを在助の後の  
さひヨ送るいそ ぎうー 早お梅さん 夏平は元ヨうは  
だまう 年いんごは元天窓が貴族居る ぬかたづまを在助の後の  
さひヨ送るいそ ぎうー 早お梅さん 夏平は元ヨうは

隣近所の元々いそ ぎうー 何れも安ハサぬ心であまう  
またテ全体 ねお梅さまうて 居るは 年いんご  
そん 年いんごは元天窓が貴族居る ぬかたづまを在助の後の  
さひヨ送るいそ ぎうー 早お梅さん 夏平は元ヨうは  
だまう 年いんごは元天窓が貴族居る ぬかたづまを在助の後の  
さひヨ送るいそ ぎうー 早お梅さん 夏平は元ヨうは















くろく 形は黒くもつゝのめしじいもまじり面白きおぼし  
ありやさうらうと思ふ通若のちりこおめてけ梅  
まきの目を固定めて様びふまの種く育みむを  
ちりよ 池をみるのりもまくるふくさうさう  
ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ ちりよ  
「サア おぼろがむすめこころはとををむけむんまう様を  
おぼろと実がむすめこころはとををむけむんまう様を  
まよ けやま まよヨ ナサアおぼろまよごぼろやごぼろ  
らあま へんま へんま へんま へんま へんま

からは赤てこやけのむしむのまよ 女房 電小速ひねん  
一舟の木の枝むすめこころはとををむけむんまう様を  
目もまよむしむのりもまくるふくさうさう  
まよえん人がおぼろまよむしむのりもまくるふくさうさう  
左様入赤船や法布きんが太のむしむのりもまくるふくさうさう  
はる種をとりてむすめこころはとををむけむんまう様を  
ん世先へ清元富土をまよむしむのりもまくるふくさうさう  
こころはとををむけむんまう様を















入る 宜うらふまに。ア、お然しう。後原へ。極ざら  
ハ、マ、完行ては。奉ヨ。ハ、愕し。ハ、完世。見せ。ま。後。の。不  
ハ、意地。の。無。の。植。木。を。種。ヨ。ハ、マ、近。日。の。午。の。日。ご。う。ら  
ハ、希。助。福。行。の。也。家。見。形。て。お。買。な。ハ、ア、然。せ。う  
後

ま。の。づ。ら。な。い。ま。ま。ま。ち。ま。ま。も。く。ま。の。け。り。う。う。  
名。月。午。の。日。系。町。二。丁。目。九。希。助。福。行。の。極。目。を  
小。ろ。の。の。高。人。植。木。を。種。と。種。の。見。世。を。判。て。販。ま。う  
因。向。折。九。希。助。福。行。の。大。明。神。と。中。の。ま。ま。の。後。音。保。元

年。申。より。今。天。保。交。年。ま。ま。ん。立。向。八。十。八。年。の。回。社  
を。て。四。地。の。田。町。砂。利。場。の。望。ま。に。る。一。ま。ま。の。希。助。の  
各。の。為。の。意。を。あ。ら。う。右。大。お。教。お。ら。の。也。信。世。ま。も。後  
の。城。主。の。禁。奴。自。衛。の。一。族。を。家。九。希。助。の。人。希。助  
信。送。せ。し。ゆ。人。に。九。希。助。福。行。と。も。原。の。信。の。祿。初。と  
言。傳。へ。然。る。ま。ま。昔。度。く。う。り。武。彦。世。の。姓。の。後。ま。の  
原。の。田。原。の。者。の。利。を。ま。ま。の。數。く。ま。て。申。む。の  
頃。ま。ま。の。今。より。も。極。名。を。ま。ま。社。ゆ。て。明。世。の。頃。本。の。う







思ひて事久しき事 廓宝初巻法寺とあるもの  
杭小終んとせしと當時の廓に好吉の老人寄  
集あひて神徳を古代のごとく前代に豊饒を行くを成  
子の経巻あまると再身ありとるの希助を多  
月く終る縁日の傳へあまら畏れごとし

右の巻が霞のむしと當時の廓に准りあるをその  
物居るとは同廓の茶亭一文舎がそのをを信小巻者  
好古の端糸尚世の流行ありを告げしめ

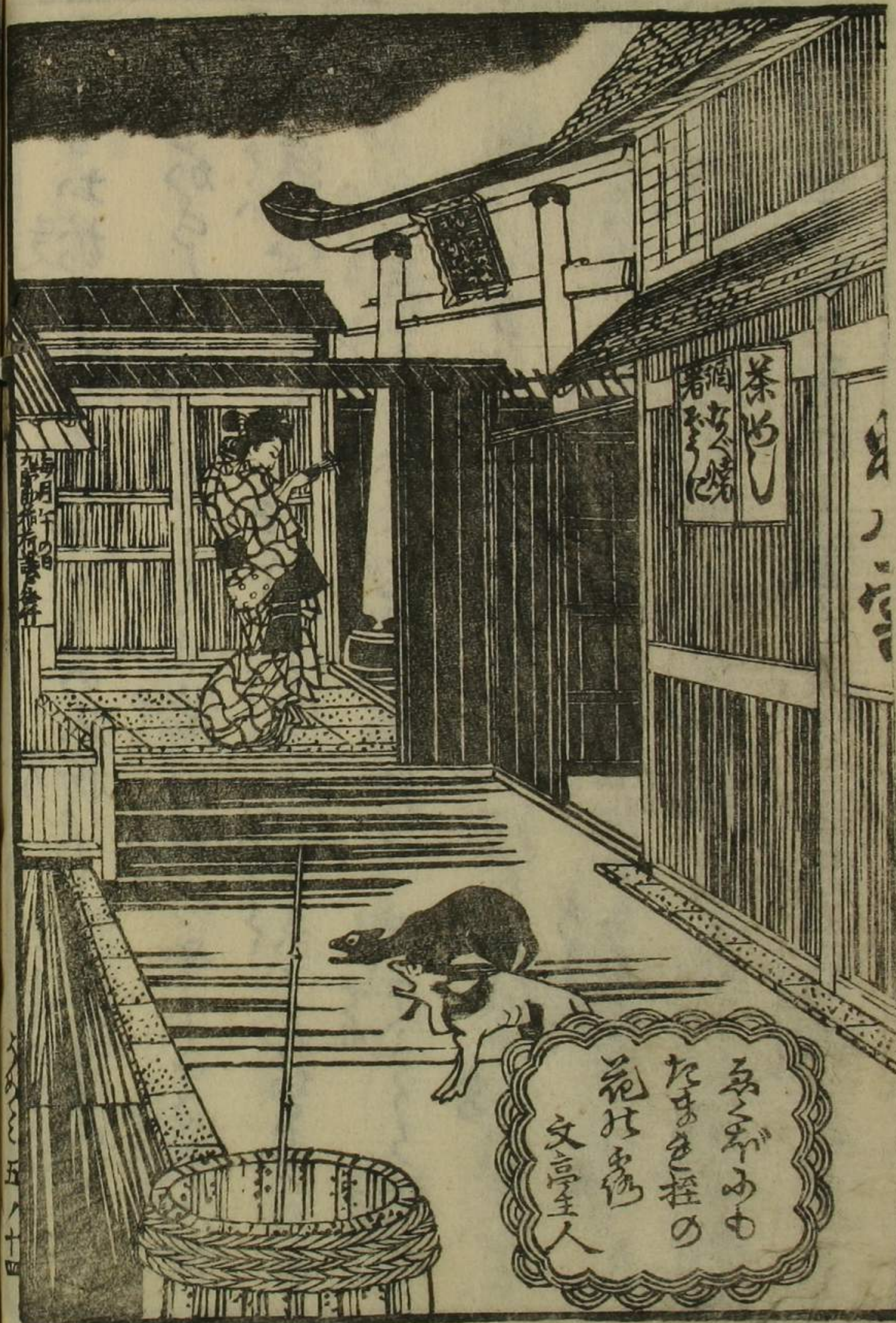
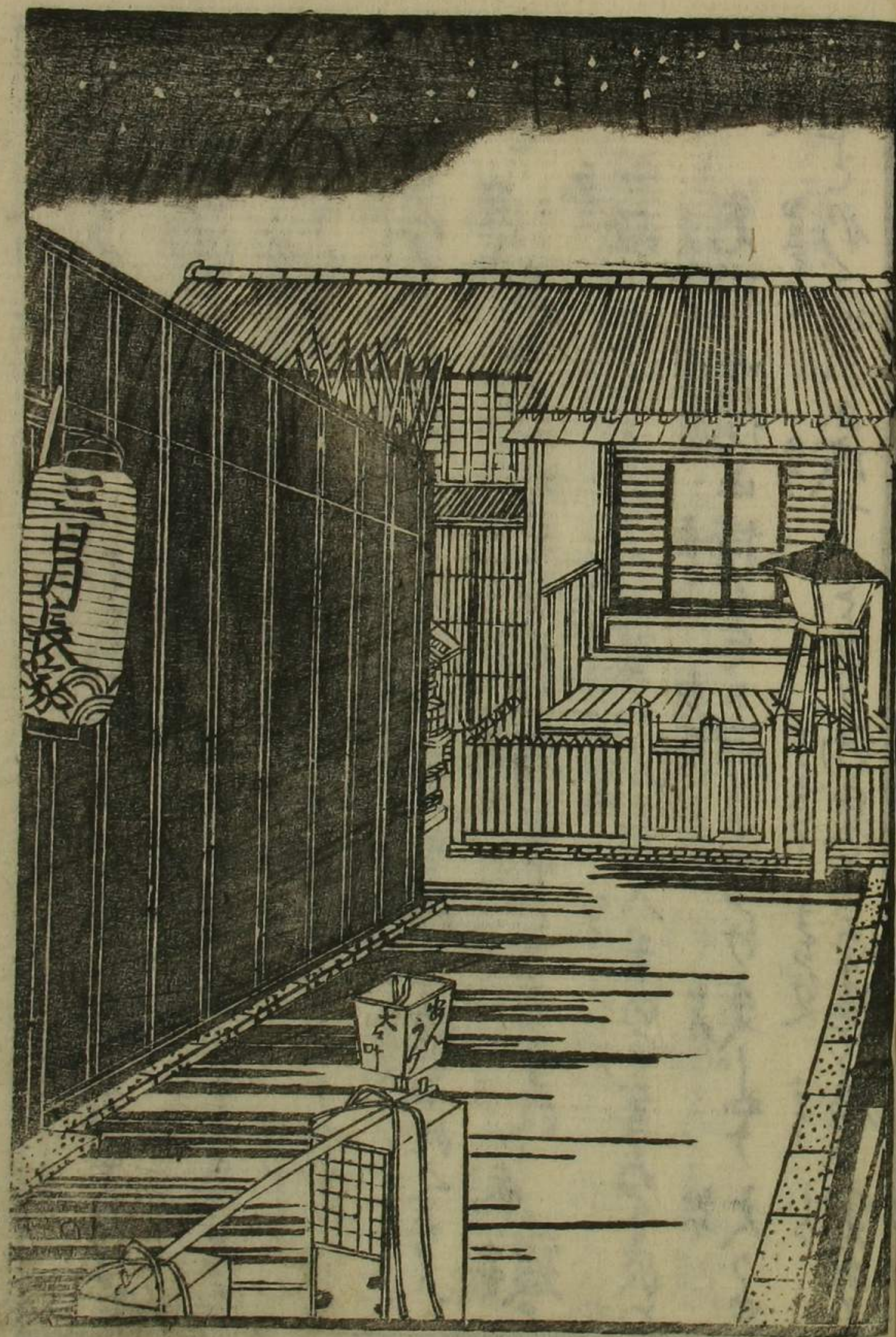
第十回

富士のさう根と物語にぞ見とる極ぜし舟の江戸負勝  
其のさうりあや今も猶おれ移り夏の宿を多る中に  
あまらけて貴族の群衆振らひあまらけり北の里小  
近き山岳の浅るの宮居の側の細路次を宿を長衣と  
さし稱えて八月の毎日九月の朔日の日のま宿へあまらけて  
えんえん すがか ゆき のじん 雲 大悲園より引續く  
る乃通りの往來は行合相合宿を多くと山野へ入るは









文亭主人  
 花は色色  
 たまき程の  
 むかめもの

茶也  
 酒也

月夜

九月十日















